

保育者をめざす学生の意欲を高める授業の工夫

白幡久美子（乳幼児教育）

篠田美里（保育内容・表現）

はじめに

—保育士養成課程の改正について—

少子化の進行、地域の子育て機能の低下、両親の就業形態の多様化等、子ども達の成育環境は著しく変化している。このような条件下で、保育に関するニーズも大きく変化してきている。そして保育士にはこれまでの子どもと向き合う保育から家庭と向き合う保育へ、サービスの多様化が要請されているのである。

現行の保育士養成課程は、平成3年4月より実施されている。この10年あまりの経過の中で、上述のような子育てをめぐる環境の変化、児童福祉法の改正（平成10年4月施行）、教員免許法の改正等を踏まえ保育士養成課程

の見直しが必要となり、検討が進められてきた。その結果、新たな保育士養成課程を平成14年4月より施行することが予定されているのである。

今回の改正の視点については、保育士養成課程等検討委員会報告（平成13年2月16日）により、図-1の6項目にまとめられている。

これら①～⑥の方向性を保育士養成課程に具体化し、新保育士養成課程において、専門性の高い、多様なサービスに対応できる保育士の養成が期待されているのである。

新保育士養成課程の留意事項を〈保育士養成課程見直しの方向性〉に照らし合わせてまとめよう。（図-2）

図-1 保育士養成課程見直しの方向性 6項目

- ① 必修科目の設定に当たって、育児相談等家庭支援を担う資質の涵養、学生の自主的学習能力の強化、乳児保育と障害児保育の一般化、保育士としての専門性の確保など時代のニーズに沿った科目の強化を図ることが必要である。
- ② 多様な資質をもった保育士の養成に向けて、各保育士養成校がそれぞれに創意工夫できるよう教科目の大綱化を図ることが必要である。
- ③ 実践力や応用力をもった保育士を養成するため、施設現場における実習の強化を図ることが必要である。
- ④ 保育士養成校の卒業生の多くが、保育士資格と同時に幼稚園教諭免許を取得して現状をふまえ、この同時取得をより容易にする観点から、幼稚園教諭養成課程との整合性をはかることが必要である。
- ⑤ 総履修単位については、学生にとって過度の負担とならないよう現行どおり68単位とすることが妥当である。
- ⑥ 保育士養成における専門性の確保及び養成校間格差が生じないようにとの観点から、教授担当者の教授上の参考として、各教科目の教授内容の標準的事項を示すことが必要であり、これを実施する。

図一 2 新保育士養成課程の留意事項

変更項目	教科目名・単位	見直しの方向性より
教養科目の削減	履修10単位 ↓ 8単位	④より：幼稚園免許状との整合性 ⑤より：学生負担の軽減
新設科目	家族援助論 総合演習	①より：家族支援の能力 ①より：自主的学習能力の強化
選択を必修化した科目	障害児保育 養護内容	①より：障害児保育の浸透 ①より：保育所以外の児童福祉士施設における専門性の確保
授業形態変更	小児栄養 乳児保育	①より：内容の充実をはかる ①より：乳児保育の一般化
単位数変更	基礎技能4単位 ↓ 2単位	④より：幼稚園教諭免許状との整合性
名称変更	社会福祉Ⅱ ↓ 社会福祉援助技術	①より：地域子育て支援機能などを内容に含むこととする。
選択必修実習	保育実習Ⅱ または施設実習Ⅱ	③より：実習の強化
選択必修科目の大綱化	17単位以上設置 8単位以上履修	②より：各養成校の創意工夫 各養成校の特色

これまでの保育士養成課程の改正に比べ、大胆な改正になったといえる。とくに選択必修科目について、旧保育士養成課程では複数の設定科目の中から、各養成校がすべての科目、あるいはいくつかの教科目を選択して開講することとなっていた。それに対し、新保育士養成課程では、履修単位数のみを規定しており、開設教科目については、各養成校の創意工夫に一任しているのである。

保育要求の多様化は、保育士の多様化、さらに、保育士養成の多様化へと発展しているといえよう。

また、単位数の算定についても「短期大学設置基準（昭和50年文部省令第21号）第7条の例により算定するものとする」（厚生労働省告示第198号、第3条より）と記述されている。これまでの講義、演習、実習等の講義形態の相違による開講時間数の規制についても、新保育士養成課程では、より柔軟な取り扱いになったといえる。

このように柔軟な保育士養成課程のもとで、保育士をめざす学生が、資格取得までに保育士になることへの意欲をよりいっそう高め、目的達成のために努力できるようにするための授業展開の方法を検討してみよう。

I 学生の主体性を重視する授業の工夫

1 新保育士養成カリキュラムにおける「総合演習」の位置づけ

子育ての責任が家庭から社会へ移行しつつあるわが国の現状において、保育者は「自己教育の可能性を拓く保育者」であらねばならない。

保育士養成校は、このような現代的ニーズに応えることの可能な保育士を養成することに努めなければならない。

それでは、「自己教育の可能性を拓く保育者」を養成するには、どのような教科課程を構想したらよいのであろうか。時間的にも、

内容的にも限られている養成校の裁量範囲では、以下のような教科目が考えられる。

図-3 保育士養成関連専門科目

〈人間像〉	〈保育士養成関連専門科目等〉
生命観	「生命科学」「精神保健」「小児保健」「小児栄養」「保健体育」
男女共同参画・モラル	「ジェンダー論」「経済学」「日本国憲法」「倫理学」「道徳論」
実務能力	「情報科学」「言語表現」
責任感	保育・福祉関連科目「保育・教育実習」「実習事前・事後指導」
知識・保育観	「保育原理」「教育原理」「保育内容総論・各論」
幼児理解	心理学関係科目
家族理解	「家族援助論」教育学・社会学関係科目
自己表現	「総合演習」実践的活動、芸術関連科目
体験・フィールドワーク	「総合演習」「保育ゼミナール」「保育・教育実習」
自信	技能関係科目

保育士としての専門的能力を確実に獲得させるには、講義はできる限り、適切な受講人数で実施すべきである。つまり児童福祉法施行規則〔指定保育士養成施設〕第39条の2に定める基準に準じて、1学級の学生数は50人以下として受講させるのが順当である。さら

に少人数制の演習科目「総合演習」を開設することにより、学生の自己責任能力と主体的参加能力を培うことが可能となる。

2 「総合演習」の受講方法について

本東海女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻における「総合演習」の開講を例として取り上げてみよう。本専攻では「保育総合演習」という教科目名で、1年次の後期に「総合演習」を開講している。受講方法は、個々の学生が自らのニーズに基づき、8～10種のテーマの中から主体的に選択する。

学生の希望をできるだけかなえるために、「保育総合演習」に関するガイダンスを入学後1年次半ばに行う。それぞれの教員が自己の提案したテーマについて、5分間ほど紹介する。この教員からの提案を手がかりに、学生は卒業まで取り組んでみたいテーマを選択し、第3希望まで記述する。学生の選択を最優先としつつ、各教員の担当学生数にもできる限り偏りのないように、調整を行う。

このようにして1年次後期から1年6カ月の間、つまり在籍期間中の4分の3の期間における学習テーマを学生が主体的に決定することになる。このように決定権が学生自身にゆだねられることにより責任感もでてくるものと思われる。学外実習にはとくに意欲的な取り組みがみられる。実習場所に遅刻するということがほとんどない。



写真1 「保育総合演習」「保育ゼミナールⅡ」での学生の発表風景



写真2 「保育総合演習」での幼稚園見学

3 「総合演習」から「保育ゼミナールⅠ・Ⅱ」への発展

それでは、本学幼児教育専攻における「保育総合演習」と、それに続く「保育ゼミナールⅠ」「保育ゼミナールⅡ」の展開について、さらに詳しくみてみよう。

保育総合演習 (1年次後期):

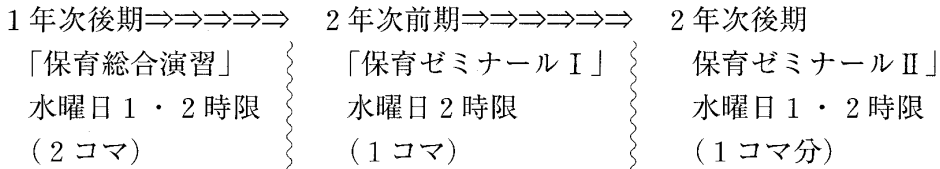
幼稚園教諭免許状取得のための必修科目
平成14年度より保育士資格取得必修科目

保育ゼミナールⅠ (2年次前期):

保育総合演習と同一グループで内容の深化

保育ゼミナールⅡ (2年次後期): 総括

【学生の受講形態】



【教員の授業担当形態】

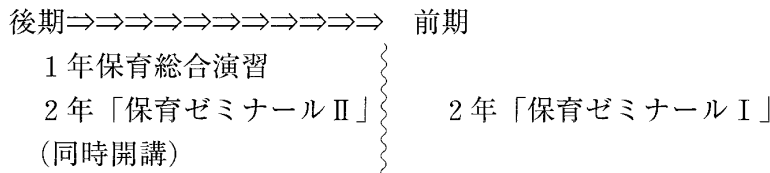


図-4 保育総合演習担当教員の合同テーマ

授業 時数	「保育総合演習」 1年生		「保育ゼミナールⅡ」 2年生
1	実習交流会Ⅰ (保育所・幼稚園実習について2年生の体験の説明を受ける。また、実習について不安な事柄を質問する)	1	実習交流会Ⅰ (保育所・幼稚園実習の体験を後輩に伝え、自らも振り返る機会とする。質問にも答え、伝達能力を育成する機会とする)
2	保育懇談会 (初めての幼稚園見学後、感想をまとめ報告する)	2	保育懇談会 (1年生の報告について質問する、子どもとの関わりについて課題提起する)
1	実習交流会Ⅱ (児童福祉施設実習について、他の実習施設との相違について重点的に説明を受ける)	1	実習交流会Ⅱ (児童福祉施設実習についての体験を話し、自らの実習を振り返る機会とする)

上記のように、「保育総合演習」「保育ゼミナールⅠ・Ⅱ」を3学期にわたり開講する。この開講法の特徴は次の点にある。

まず3学期間を同一教員が基本的に担当する。だから保育に関する幅広い知識技能のみならず、一つの課題を深める機会を提供できる。探求心、発表の責任感、決定能力、開発能力等を受講生に期待できる。

次に、後期には「保育総合演習」の一部と「保育ゼミナールⅡ」とが同時開講となっているので、図-4に示したように1・2年合同の授業を複数回実施できることが挙げられる。本学幼児教育専攻の授業はすべてがクラス単位を基本としているので、学年を越えての交流の機会が乏しくなりがちである。この合同授業を契機に2年次生は自らの体験を客

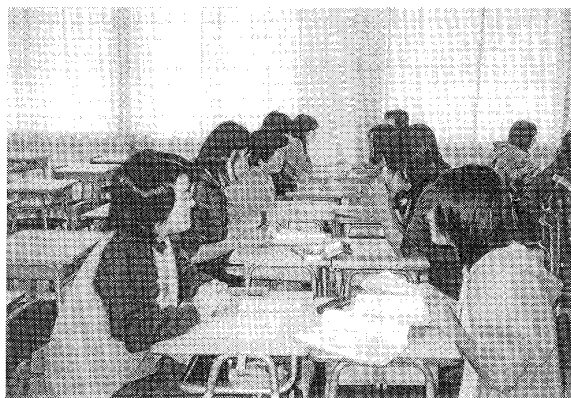


写真3 「実習交流会」より



写真4 「実習交流会」より

観的に省察し、向上に努めることができる。1年次生の方は、教員から実習指導を受けるのは異なり、現場を体験した2年次生から新鮮な話題を提供してもらうことで、保育者になることへの意欲を増すことができるのである。

さらに「保育総合演習」を2時限続きの開講にしていることにより、保育所訪問、幼稚園見学その他子育て支援活動などの学外実習に参加することが容易になることも特徴として挙げることができる。学外実習に際し、他の授業との交換が必要ないなど、手続きが容易になっている。このことにより、学生の体験学習の機会を増大させることができたことは、大きな成果である。

Ⅱ 「総合演習」および「保育ゼミナール」の実践事例

1 「実習交流会Ⅰ」（白幡ゼミ）から

「白幡ゼミ」での「実習交流会Ⅰ」の実践を紹介しよう。

1年次生：11名

2年次生：14名

開催日時：平成13年10月10日（水）

11時20分～12時

テーマ：保育所実習と幼稚園実習で体験報告

目的：

1年次生＝実習への心構えをもてること。
実習を喜んで迎えらるるよう

なること。2年生の説明を正確に理解できること。

2年次生＝実習を振り返り、自己採点できること。実習の重要事項を1年生に正しく伝達できること。

方法：

1年次生1名と2年次生1・2名で1グループを構成する。

2年次生はあらかじめ配布されている「実習交流会ノート」に記述して、説明内容を準備しておく。このノートに基づき、2年次生から1年次生に対し語りかけることとする。

1年次生は2年次生から得た実習知識について、交流会終了後にレポートを作成する。

資料：

1年次生—筆記具

2年次生—保育所実習・幼稚園実習記録簿、「実習交流会ノート」（実習に向けての準備、実習期間中の生活、実習終了後の挨拶等の大項目を全10小項目に分け記載しておく）

交流会の40分間という時間設定について、2年生は開始まではとまどいがある。つまり、40分間を主導的に語ることができるのだろうかという不安である。しかし、そのとまどいも上記の資料を用意しておくことにより、先輩に実習の意図を正確に伝達できることを体験するのである。交流会後の各グループの感想によれば、40分間の対談は、大半のグルー

ブ(11グループ中10グループ)にとって非常に短く感じられているのである。

交流会後、1年次生が書いた感想を事例として掲載することにより、この授業の効果を確認したい。

〈1年Aさんの感想より〉

2年生の方の話を聞いて、何だかとてもワクワクしてきました。子供と一緒に生活するのは楽しそうです。ご飯を食べたり、工作したり。子ども達の手本となることも大切です。そのためには、絵本の読み方、ピアノの練習、工作など毎日少しずつでも練習しなくちゃならないと思いました。(後略)

Aさんのように、交流会を開催することにより、実習への期待、ひいては保育者になることへの期待がより高まれば、この授業の成果は十分である。

2 「子育て支援」ゼミより

「保育総合演習」「保育ゼミナールⅠ」「保育ゼミナールⅡ」を通じて、3学期間にわたり、関心を同じくするグループで学んでいく。このような継続的授業は、ほかには設定して

いない。継続的な学習により、将来の保育者に思考の基本と研究の手順を提案することをめざしている。また、一つの課題に継続的に取り組むことにより、保育者としての専門性を獲得すること、自信をもつこと、社会人になることへの希望をもつことも目標としている。

白幡ゼミでは「子育て支援」をテーマに「地域子育て支援センター」「保育所保育における子育て支援」「預かり保育」と、3つの大項目を設定した。さらに9つの小項目を提案し、受講学生の選択希望に応じる方法を探っている(図-5)。課題は、内容的に過重にならぬように、また体験や経験に基づいた検討ができるように配慮している。

これらの課題の中から、各学生がテーマを選択して、自発的・自主的に取り組み、実態と展望についてまとめる作業を果たす。各自の能動的学習態度が必要とされるので、授業に参加することを何よりも重視している。

実践の現場としては、保育所・幼稚園を手がかりとすることを基本としているが、各地域の行政関係の教育活動を課題とする場合もある。「総合演習」では受講学生全員で複数の幼稚園と保育所を訪問する。だからこの体験を生かして保育ゼミでは、個々の学生が各実習施設に問い合わせ、協力願うことになる。

図-5 「白幡ゼミ」のテーマ

【子育て支援】

(1) 地域子育て支援センター(保育所)の実践に関して

- ① 子育て電話相談：電話の数、内容の分類、対象となる子どもの年齢区分
- ② 親子教室：開催回数、対象年齢(親、子ども)、内容、開催の問題点と課題
- ③ 子育て講演会：講師、内容、反響など

(2) 保育所保育における子育て支援

- ④ 低年齢児保育の課題：保育時間、保育環境、保育科
- ⑤ 障害児保育の課題：受け入れ、個に応じた保育、共生の理念
- ⑥ 休日保育：開設数、担当者、保育時間、保育料、親の要求

(3) 幼稚園の預かり保育

- ⑦ 預かり保育の開設について(実状)：時間数、場所、親の要望
- ⑧ 預かり保育に従事する保育者：専任または兼任、資格、連携
- ⑨ 預かり保育の今後の展望：現状の分析、問題点、子どもや親の声、理想の形態

3学期間の受講により、積極的に物事に取り組み始めるようになっていく。一人で保育所を訪ねる、子育て支援センターの親子教室でお母さん達にインタビューするなど能動的に自分の責任で学習するからである。

「子育て支援」は、現代の大きな課題であるとともに豊かな人間関係にも関わっている。この3学期間（1年6カ月）の能動的な学習を契機として、能動的な生き方ができるようになることを目的としている。

（白幡久美子）

3 「実習交流会Ⅰ」（篠田ゼミ）から

《日時》：平成13年10月3日

《出席者》1、2年生篠田ゼミ受講者21名

《目的》

1年生：もっとも関心の高い「ゼミ・実習・就職」について先輩の体験談を聞くことによりこれからの学習の見通しを立て、保育者への意欲を高める。

2年生：実習の体験や就職活動への取り組みを話す体験を通して実習を成し得た自己達成感を感じるとともに、就職活動へ向けての新たな気力を沸かせる。さらに、自分の保育観の育ちを認識し、新たな学習意欲へと結び付ける。

《方法》

1年生：3グループに分ける

- ①ゼミでの課題の取り組みに関して
- ②これから迎える実習について
- ③就職への見通しについて質問したいことを書き出す。

2年生：3グループに分ける

- ①ゼミでの学習の流れ
- ②体験してきた実習について
- ②今取り組んでいる就職活動について「実践してきたこと」と「課題として残っていること」について20分間話し合いをさせ①②③の分担を決める

その後、1年生3人、2年生4～5人で1

グループとし、45分間、1年生から2年生への質問形式で進める。2年生が答えてくれた内容を1年生は記録する。

《持ち物》：

2年生実習ノート（保育所／幼稚園／施設の3種類）

1年生にとって、現時点に於いてこれから体験する予定の3種類の実習に対して具体的な質問事項を挙げることは難しいと思われるが、実習に対する不安要因について聞いてみるとおおよそ下記のようなことであった。

- ・今の自分は実習が始まるまでにどのくらい学習をしなくてはならないのか？
 - ・そのためにどんな苦難が待ち構えているのだろうか。自分が耐えられるだろうか？
 - ・実習そのものはどんな様子なのか。
- 等、漠然とした不安であった。

後期授業の3回目、10月に行った学習交流会(1)では、実習までにこなさなくてはならない学習の見通しが把握できれば十分と考える。

2年生にとっては、自分のたった半年の足跡を後輩が真剣に聞いてくれたことや、賞賛されたり、実習ノートの筆記量に驚かれたりすることで、自分自身の自信につながっていった。あらためて実習での頑張りに気付くことができ、達成感を味わうとともにそこで得た自信がいつそう保育者への意欲の高まりとなり、学習意欲にまた、就職活動へと結びついていく。また、先輩から後輩に対しての反省を含めたアドバイスは驚くほど説得力があった。

（一年生の記録より）

Aさん：（入学して）今までの授業とはぜんぜん違ったので試験のことや実習のことがとても心配でした。それに、私は人の前で話すのが苦手なので本当に保育士になれるのかどうか心配でした。でも先輩も全然自信がなかったし、いろいろ分からなかったけど、実習で頑張れたと、聞いて少し安心しました。

実習ノートはものすごくたくさん書いてあったのでびっくりしました。あんなにかけるか心配です。手遊びや絵本や折り紙をたくさん覚えたいと思いました。ピアノは絶対にいると聞いたので頑張ろうと思いました。

Bさん：初めて先輩と話ができた。実習の様子が聞けてとてもよかった。実習ノートを書くのは時間がかかるそうだけど、自分がその日に行動したことや、子どもと話したことを書くのでたくさん書けるそうだ。今は日記のように思ったことや一日の出来事をたくさん書いてみるとよいと教えられました。

実習で子どもと一緒に遊ぶことは楽しいし、園児がいっぱいおしゃべりしてくれると聞いたので楽しそうです。手遊びや歌をいっぱい覚えておきたいと思った。後、授業はできればたくさんとっておくとよいそうだ。ピアノは絶対就職にいるし、練習しないと絶対に上手にならないので、もっと、もっと練習しようと思いました。

2年生

Cさん：(一年生と話すことは)最初は緊張したし恥ずかしかったけれどだんだん慣れてきて、(瞬く間に)時間がたつて楽しかった。一年生が真剣に聞いてくれるので、ドキドキしたけど、実習ノートを見て「すごい」といわれちょっとほっとした。(実習ノートの記録は)自分でもよく頑張ったと思ったので気分がよかった。それに、自分でも去年だったら絶対できないと思っていたので。ノートは頑張ろうと思えば書けると言いました。今は実習はもう一度行きたいくらい楽しいと思うし、手遊びや、絵本読みも自信ができたので恥ずかしくなくできます。去年はとてもできなかったのに「できる」ということ、恥ずかしいと思わないことが進歩した点

です。

Dさん：初めは恥ずかしかったが最後のへんでは楽しんでる自分がありました。実習のことを話していて、頑張ってる損はないと思いました。頑張れば自分自身が成長していくことに気づきました。これからの授業もしっかり聞いて、製作や遊びをたくさん覚えて子どもの気持ちを理解できる先生になりたいです。

(注) () 内の言葉は筆者がつけ加えた

第一回の実習交流会は3グループとも実習の話題が中心であった。先輩から実際の記録ノートを見せてもらいながらの話は充分後輩に実習に対する意欲、さらに学習に取り組む意欲を引き起こすことができた。今回は就職活動についてまでは話し合えなかったが実習までの学習の見通しを感じる事ができた事で充分である。また、先輩である2年生も実習での頑張りをノートを提示することで後輩に賞賛され、半年の間に保育所、幼稚園、施設と三箇所の実習を成し得た達成感を味わった。そして、同時に大きな自信も得た。また、上記のCさんやDさんのように「自分自身の成長の気付き」ともなっている。そしてDさんにおいてはこんな先生になりたいと具体例が出せるほど保育観が育っている。

4 「音楽ゼミ」の授業から

このゼミでは

- ① 私達の生活と音楽がどのように関わっているか
- ② 子ども達の文化の中に見られる伝承遊び
- ③ トーンチャイム及びハンドベルを使った演奏
- ④ ペープサート劇の上演をおこなってきた。

目的は学生自身の自己表現能力を高めること。さらに企画の構成、実践力をつけることであった。

《記録》

一年次では、「音見つけ散策」「どんぐり笛作り」を通して自然の中で奏でられる音を体験した。自然界の中での風が誘い奏でる音に気づき、空気と同じくらいに溢れている生活の音や、意図的に流される町の中の音楽について考えた。また、手作り楽器、手遊び、わらべうたあそび等の文化がどのように子どもに受け継がれ受け入れられているのかについて調べていった。

さらに平行して、13人で一つの曲を演奏するハンドベルやトーンチャイムの演奏によって心を寄せ合う体験し、さらに付属幼稚園での発表の機会を通し、少しずつ自信を獲得していった。

2年次になり、「保育ゼミナールⅠ」と「保育内容研究」のペープサート劇上演を重ね、「美術ゼミ」、「言語ゼミ」と連携を取りつつ、実践に取り組んだ。ゼミでの実践活動は少人数であるためそれぞれ1人ずつが重要な役目を担っている。必然的に、自分で考えて行動しなければならない事柄や、話し合っただけでは決まなくてはならない事柄が出てくる。又、自分が休んでも、誰かが休んでもたちまち支障が出てくる。こんな体験から人間関係の成長を感じられた。これらのフィールドワークを通して、学生の感性の育ち、自己表現力の高揚を経て、自らの自信が育っていくのである。

Ⅲ 授業の工夫と保育者意識の高揚

1 学生への聞き取り調査（インタビュー）より

学生を対象に「保育総合演習」「保育ゼミナール」について聞き取り調査を行った。

対象：白幡ゼミと篠田ゼミの1、2年生

当日出席の46名

日時：平成13年10月10日

2年生（全講義の三分の二終了）1年生（3回目）

内容と結果：

- ① 〈保育総合演習〉〈保育ゼミナール〉の授業の面白さについて
 - ・少人数なので先生や他の人へ意見を言いやすい（10）
 - ・自分が自主的に授業に参加していると感じる（15）
 - ・自分で課題について調べ発表するのでやる気が出るし面白さも感じた（19）
 - ・一つの課題について多面的に意見が聞け、そのことによって新たな課題に気づくことができた（7）
 - ・実祭に保育所を訪問でき乳児や園児に接することができる（7）
- ② 実習で役に立ったこと（2年生のみ回答）
 - ・発表体験をしたことで園児の前で話す事の自信につながった（13）
 - ・手遊びや絵本読みが不安なくできた（13）
 - ・実習に抵抗なく入ることができた（4）
- ③ 保育総合演習、保育ゼミナールで獲得したと思う自分の能力（2年生のみ回答）
 - ・人前で自分の考えをまとめて話す力（21）
 - ・インターネットなどで資料を探したり、課題をまとめること。（10）
 - ・自分で課題を探すことから（4）
 - ・自分から進んで取り組み活動する積極性（10）
 - ・たくさんの知識が得られた（8）
 - ・保育士への期待が高まった（8）
 - ・みんなで協力して一つのことをやり遂げる楽しさを味わった（6）
 - ・努力すること、繰り返し練習することでできるようになる、変われることを体験した（5）
- ④ 一般の授業とゼミの違い
 - ・自分から授業に参加する（12）
 - ・実体験できたこと得た自信（16）
 - ・意見を発表する機会が多いので調べものをするようになった。（5）
 - ・ディスカッションしやすい。人の意見も真剣に聞く。（21）

- ・他のクラスの人と深く関わることができ
友達の輪が広まった。(21)
- ⑤ ゼミ形式の授業で困ったこと
 - ・クラスがばらばらなので連絡事項を伝える
時大変だった (2)
 - ・自分の意見を必ず発表しなければならない
のが苦痛だった (4)
 - ・遅刻した時に入りづらいし、他の人に迷惑
になる (3)
 - ・自分1人で取り組まなくてはいけないこと
(2)
 - ・課題ができていないとき出席しづらい
(2)

考 察

この調査の目的は保育総合演習とゼミナールの授業形態が一般の授業形態と比較して学生にどのように受け入れられているかを確認すること、さらに、この形態のプラス面と問題面の検索であった。

調査結果から見ると概ね良く受け入れられていると感じた。

ゼミ形式のねらいは、少人数を生かして一人一人と向き合うこと。さらに、そのことによって本学幼児教育専攻の目標である「自己教育の可能性を拓く保育者」の育成や資質の高い保育士の育成に繋がることである。

学生は、白幡ゼミでは、一人一課題、それぞれ自分で選んだ課題に取り組んでいる。一つのテーマを深化させ調べていくことはゼミならではの授業形態である。学習意欲の高い学生にとって積極的に授業に関われること、次々と課題を見出したことで自分自身の成長を感じることができる。また、自分で調べ、まとめた上で発表しゼミ仲間から賛同を得る体験は学習の達成感を味わうとともに自己への自信となる。さらに、仲間の発表についてディスカッションすることで、自己の保育観が高まるとともに、知識の拡がりもある。

一方、実践活動を中心とする篠田ゼミの場合でも、遊びや作品が子どもに受け入れられる工夫が必要となる。その為には各自が調べたり、話し合ったりする。また、作品発表に

対しては、企画構成力、実践に対する技能、自己責任と協調する事、協力することが必要となってくる。これらの体験を通し、人間関係の向上が見られる。さらに、練習体験により、諦めずにコツコツ続けること、努力することによる自分の成長を感じ取ることができる。

問題点としては、欠席が続いた時、課題が上手くこなせなかった時等、トラブルが発生した時などに、他の人に迷惑をかけた、自分だけが取り残されたのでは?と必要以上に、心配している点である。これは、別の時間に一对一で対応する等によって学生の負担、苦痛を緩和することができる。いずれにしても、学生とゼミの担当教員とつながりを持つこと、そして、それにより学生の学校生活や学習に安心感をもたらすこと。このことをも含むことがゼミ形態の利点と捉える。

2 自己達成感と保育者観

近年、義務教育の小、中学校時代から、熾烈な人間関係の中で過ごしてきた学生にとって、「とにかく目立たないこと」「自分より強い人には何事も従順に従う」「多々不満はあっても意見を戦わしていやな思いをするより、我慢を重ねて、或いは無関心になって、自分を出す事を極力避けている」「常に誰かと一緒にいたい」「自分の意見に同調してくれる人の傍に居ないと不安でたまらない」と言った依存性の強さ、自立に関しての幼稚さが顕著に見られる。短大生になって、急に、「もう自分で考えて行動しなさい。その代わり責任は自分にありますよ」「自分自身で考えなさい」「自分の意見を述べなさい」と言われて戸惑うばかりであり、不安な思いが強い。こんな原因があるからなのか、近年、学生の自己表現能力の低下が著しいと感じられる。当然、人前で、手遊びを披露したり、歌ったり、ピアノを弾いたりなど実技を演じることは避けたい気持ちでいっぱいである。

ゼミ活動はクラス授業形態で友達ができつつある時期に、クラス授業とは異なる形態で開始される。当然、交友関係にも変化が出て

くる。

そんな時に学生にとってまず必要なのは、自己評価の高揚である。そのためにもまず、少人数の集団で受け入れられること、認められることを体験させたい。

次にゼミ単位での幼稚園見学ではじめて子どもと触れ合う。ここでは、子どもに受け入れられ楽しく遊ぶ体験が得られることを願う。一つ一つの体験が自信に繋がっていくからである。

子どもと関わるチャンスがある一方で、同時にたくさんの講義も受講していく。講義で動機付けられ社会にも目を向けることができ、見聞が広がり、子どもに関する社会的な問題が見えてくる。このようにして、漠然とした保育者像がだんだんに形作られていくのである。このままゆっくりのペースで学習が進められれば問題はないのだが、実際はそういう訳にいかないのである。

2年間の養成期間では、多くの科目内容が細切れに、ばらばらにどんどん提示され進められる。保育者になることを夢見て入学してきた学生に、これを自分自身の中で理解したうえで総合的に捉えていくことが要求される。そうでないと春休みから始まる実習にも対応できないからである。「総合演習」はこのばらばらに提示された科目を分類別に手練り寄せ繋げていく役目をはたすことも担っている。よって、それぞれのゼミでは、内容や実践を通して、総合的に保育を掴めるように工夫し、保育観の創造を援助していかねばならないのである。一年次の後期から二年次終了まで「保育総合演習」「ゼミナールⅠ」「Ⅱ」へと繋げて開講することで、この重要な部分を補っていききたい。

おわりに

今回の保育士養成カリキュラムの改正は、変動する社会の要請を受け入れることのできる高い資質と柔軟な思考及び実践力を持った保育士の養成を目指してなされた。つまり、今まで以上に、広がった保育のニーズに対応できる、高資質の保育者の養成が望まれているわけである。一方で、文部省の導入した「生きる力を育む」ゆとりのある教育を受けてきた学生を受け入れる養成校として、ますます膨れ上がる課題に対応していかねばならない。しかも、養成校間の格差が生じないように、履修単位は学生の過度の負担にならないように、しかし、多様な資質を持った保育士の要請に向けて養成校側の独自の創意工夫が求められている。この現状を鑑み「保育総合演習」とゼミナール「Ⅰ」「Ⅱ」における「学生の意欲を高める授業の工夫」の実践例を考察した。

多様なニーズに対応できる保育士養成において今後益々独自の創意と工夫が求められることであろう。
(篠田美里)

参考文献

- ・「平成12年度版 教育小六法」學陽書房、2000年
- ・全国保育士養成協議会「会報 保育士養成」2001年
- ・飯田良治・民秋言「課題研究・ゼミナールの手引き」萌文書林、1996年
- ・日本保育学会「保育学研究—保育者の専門性と保育者養成—」第39巻 第1号、2001年
- ・全国保育士養成協議会「平成13年度保育士養成セミナー実施要綱」

白幡久美子(乳幼児教育) p 1～7

篠田美里(保育内容表現) p 7～11

—児童教育学科 幼児教育—